

## 大学生の文化類型とその形成構造

丸 山 文 裕

- 1 はじめに
- 2 クラーク＝トロウの下位文化類型
- 3 サンプルの諸特性プロフィール
- 4 下位文化の類型
- 5 下位文化の形成構造
- 6 おわりに



# 大学生の文化類型とその形成構造\*\*

丸山文裕\*

## 1 はじめに

本稿は、我が国の大学生の下位文化を実証的データを基に分類し、それらの形成構造の究明を試みたものである。ここでいう下位文化とは、大学生の特定グループが共有している関心、価値、教育観、期待、態度の集合的総称である。我が国において学生の下位文化研究は、教育社会学の分野ですでに多くの蓄積をみているが<sup>1)</sup>、研究の対象は中学校、高等学校を中心とした中等教育レベルであり、高等教育レベルでの研究は未発達といってよい。中等教育レベルでは、非行や落ちこぼれが社会問題化し、その原因追求のため逸脱研究や生徒文化研究が強調促進されたと考えられる。しかし高等教育レベルでは、学生運動の高揚期以降、学生に関してさしたる社会問題が発生せず、このことが、学生文化研究に対する関心を薄れさせたと推測することができる。

他方、大学生の下位文化の構成要素である価値、期待、態度、関心、教育観等のそれぞれは、大規模な意識調査を通じて次第に実証的に明らかにされつつある<sup>2)</sup>。しかし、そこでの研究は、大学生の価値その他の特性の単純な記述が主であって、大学生の下位文化の類型や構造、その形成のメカニズムの解明を試みたものではない。つまり、大学生としての個人は、大学という組織の中でいかなる態度、価値、行動をとり、一定の基準によってどのように分類されるのか、個人は組織の中でそれとの相互作用を通じてどのような影響を受けるのかといった社会学的な問いが欠落していた。大学生の下位文化を社会学的な問題関心から分析することは、すでにアメリカでは多数行われているが、我が国においては、未だそれほどの研究蓄積はない。

そこで本稿では、①我が国の大学生の実証データを用いて記述した後、大学生の下位文化研究において古典的なクラーク＝トロウの類型に依拠し、②大学生の下位文化を類型化する。そしてこの類型がクラーク＝トロウのそれとどのように類似または異っているかを検討した後、最後に、③大学生の下位文化形成にどのような要因が関与しているかを精査する。

## 2 クラーク＝トロウの下位文化類型

社会学者のB・クラークとM・トロウは、組織の官僚制化、職業の専門職化、高等教育の平等化がどのように大学生の文化に影響を与えるかを考究した論文で、アメリカの大学生の下位文化を4つに類型化している<sup>3)</sup>。一つは、「カレッジイイト (collegiate) 文化」で、これはフットボール、同好会

\* 広島大学 大学教育研究センター助手

\*\* 本研究は、昭和57年度科学研究費補助金・奨励研究(A)によるものである。

組織、デート、車、アルコールの世界に象徴される。この文化に属する学生は、大学に対して愛校心、帰属感を持つが、教師、授業、成績に対してはさほど関心を示さない。この文化での社会的活動には金銭的な諸掛かりが必要であるので、この文化の支持者たちはミドルクラスおよびアッパーミドルクラスの出身であり、寮施設の整備された大規模な州立大学で頻繁にみられる。

第二の類型は、「職業的文化」である。この文化は、ワーキングおよびローミドルクラス出身の野心的で上昇志向の強い学生で構成され、主として都会の大学で見られる。彼らの関心事は、授業、単位と学位、良い職業であるが、単位を取るのに最低限の知識には興味を示すが、それ以上の知的関心はない。この文化のシンボルは、大学の就職課である。

クラーク＝トロウの第三類型は、「学問的文化」である。この文化に属する学生は、鋭意勉学に努め、良い成績を取り、授業以外でも学問について学生間で討議を行う。彼らは知識の追求に関心があり、大学院やプロフェッショナルスクールへ進学希望を持つ。この文化のシンボルは、図書館、実験室、ゼミである。

第四の類型は、「ノンコンフォーマリスト (nonconformist) 文化」である。この文化に属する学生は、前述した学問的文化に属する学生と同様、知識の追求に関心を持つが、学問的文化との相違は、その知識が大学の授業とは直接関係のない芸術、文化、政治に関したものである。彼らの準拠集団は、大学内よりも大学の外で見出され、アイデンティティ追求が在学中の主目的である。

以上の4類型を図示したのが図1である。クラークとトロウの類型は、図に示したように横軸は、「大学への関与の度合」、縦軸は、「知識追求の度合」という2つの基準によって構成されたものに他ならない。クラークとトロウは、これら2つの単純かつ適切な軸を用いて、現代アメリカの大学生の下位文化を見事に類型化、それぞれの下位文化の特徴を表出させている。ここで注意しなければならないのは、この類型が個人のパーソナリティを区別するものではなく、共通の態度、価値、行動を分かちあうグループの区別をする理念型であることである。数多くの学生文化類型の中で、クラーク＝トロウ類型の理念型としての価値は、その後、多くの学生文化研究がこれを分析枠組として用いたことから明らかである<sup>4)</sup>。同時いくつかの研究によってこれらの類型の存在がある程度確識され、また各類型の特徴が妥当であることが検証されている。本稿においても、このクラーク＝トロウ類型を参考にし、我が国の大学生の文化を記述し、類型化する。

### 3 サンプルの諸特性プロフィール

大学生の下位文化を類型化する前に、本稿で用いるサンプルデータとサンプルの諸特性について検討しておく。データは、昭和55年6月に実施した「大学生の職業観に関する調査<sup>5)</sup>」の結果を使用した。この調査は、愛知県下に存在する5大学の経済学部4年生を対象にしており、質問紙法・留置法を用いた。5大学は国立1校、公立1校、私立3校である。サンプル数は1校当たり約100、合計519である。

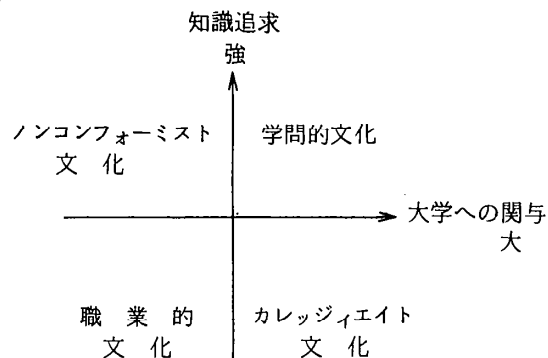


図1 クラーク＝トロウの下位文化類型

サンプルの主な属性は、以下のとおりである。<sup>6)</sup>性別は、男子学生 87.6%、女子学生 12.4%という構成である。

家庭背景として、父親の学歴と父親の職業をみると学歴について、①新制中学、尋常小、高等小卒業の割合は、43.5%、②新制高校、旧制中学、師範学校、実業学校卒業が 37.4%、③新制短大、新制高専、旧制高校、旧制高専、高等師範卒業が 9.1%、④新制大学、旧制大学卒業が 10.0%となっている。他方、父親の職業について、①専門技術職は、9.7%を占め、②企業経営者、管理職は、18.5%、③事務職は、20.3%、④商工サービス業自営は、16.5%、⑤販売サービス業従事者は、3.4%、⑥農林漁業自営は、9.7%、⑦労務職は、15.7%、⑧その他が、6.2%という分布である。

本人の出身高校について刮目すると、①進学有名校出身者は、36.0%、②大部分の生徒が大学進学するが、進学校としてはそれほど有名ではない高校の出身者は、47.9%、③普通科だが、大学進学者が少ない高校の出身者は、5.5%、④職業高校、その他が 10.5%となっている。彼らの高校時代の成績分布は、①非常に良かったと回答した者、6.1%、②良かったと答えた者、31.2%、③普通、48.1%、④悪かったと回答した者、12.2%、⑤非常に悪かった者、2.4%である。

### 3-1 学習態度のプロフィール

以下では、大学生の下位文化を記述するために、彼らの諸特性を順次検討していく。最初に検討するのは、彼らの学習態度についてである。我が国の大学生は、諸外国の大学生に比べそれほど勉強しないとしばしば指摘されるが、経済学部4年生のサンプルの授業以外の勉強時間は次のとおりである。1日の量は、試験前で、①0～1時間と答えた者は、6.1%、②1～2時間、9.3%、③2～3時間、18.6%、④3～4時間、25.5%、⑤4時間以上勉強すると回答した者、40.5%となっている（この試験前授業以外の勉強時間についての質問項目は、次節で行う因子分析における変数番号①として用いる）。しかし、試験前以外では、学生の勉強時間は著しく減少する。①0～1時間が、61.2%、②1～2時間が、24.8%、③2～3時間が、7.9%、④3～4時間が、3.0%、⑤4時間以上が、3.2%となっている。

授業以外の勉強時間を、高校時代のそれと比べて大学生に判断させた。その結果、①大学での勉強時間が、高校時代のそれと比べて多いと答えた者は、6.3%、②ほぼ同じが、16.4%、③少ないと答えた者が、77.2%を占めている。大部分の学生は、大学での勉強時間が、高校時代よりも、少ないと答えている。外国人知日家が、日本の教育について言及する時、必ずといっていいほど指摘するのは大学生の不勉強ぶりであるが、これは確かに当たっているといえる。

それでは、大学生はどの程度授業に出席するのであろうか。専門科目に限定すると、①出席率4割以下の者は、40.7%、②4～6割は、19.8%、③6～8割は、18.6%、④8割以上は、20.8%である（これは、次節において変数番号②として因子分析に用いる）。

以上から判断すると、大学生はそれほど授業にも、授業以外の勉強にも積極的ではなさそうであるが、彼らは大学での成績については、比較的重視している。良い成績をとることは、大学生活にとって重要かという問いに対して、①非常に重要であると答えた者は、5.7%、②ある程度重要であるが、49.8%、計半数以上が重要と考えている。③それほど重要ではない、36.4%、④全く重要ではないと回答した者、8.1%である（変数番号③として因子分析に用いる）。

大学での授業は、高校の時と比べ、心理的な負担が大きいのだろうか、小さいのだろうか。①非常に負担に思うと答えた者は、3.4%，②ある程度思うが、13.6%，③それほど思わないが、56.7%，④全く思わないが、26.3%であり、大部分の学生にとって大学の授業は、高校時代よりも楽であるといえる（変数番号④）。サンプルの学習態度を検討したが、まとめると、これらの大学生は成績についてはある程度関心を示すものの、それ以上の知的活動についてはさほど積極的ではない。以上から判断するとサンプルは、クラーク＝トロウのいう「職業的文化」に最も近いといえる。

### 3-2 関心事のプロフィール

次に、大学生が現在何に関心、興味を持っているか、探ってみよう。図2は、学生がそれぞれの項目にどの程度関心を持っているのかを示している。選択肢に図のような1から4のスコアを与え、平均値を算出した。比較的関心が高い項目は、⑨就職、⑪友だちつきあい、⑫家族との結びつき、⑬恋愛、⑭趣味、娯楽である。逆に、相対的に関心の低い項目は、⑮学生運動、⑩信仰や精神修養である。関心の高い項目としての⑨就職は、先に指摘したようにこのサンプルが

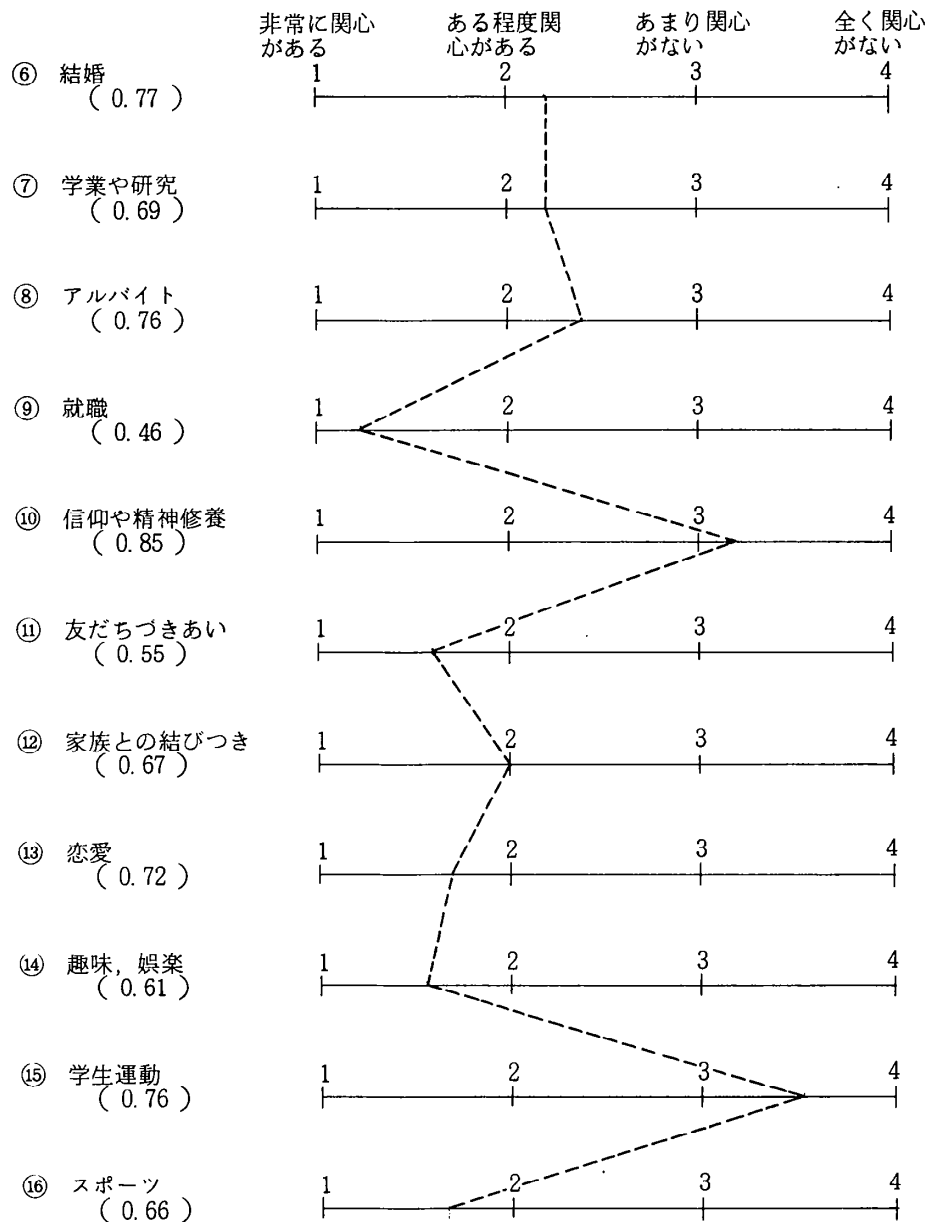


図2 関心事のプロフィール

( )内はSD、項目の番号は、次節で行う因子分析における変数番号に対応する。

クラーク＝トロウの「職業的文化」の傾向を示すことと矛盾しない。しかし同じく関心の高いとされた⑭趣味、娯楽および⑮友だちづきあい、という項目は、「職業的文化」と憧着はしないが、むしろ「カレッジイイト文化」とより整合的である。他方、⑯学生運動、⑩信仰や精神修養という項目の関心が低いのは、このサンプルの学生が「ノンコンフォーマリスト文化」に支配されていないことを示している。

3-3 大学教育の目的についてのプロフィール

次に諸々の大学教育の目的についてどの程度重要か尋ねた結果が、図3である。これによると、⑯人間関係を広くして豊かな人格を養い協調的人間をつくること、⑰基礎的な一般教養によって知識を広めること、といった項目が比較的重要とされている。反対に、⑳幸福な結婚や良き家庭をつくるための資質を養うこと、㉑職業教育を重んじて就職に必要な技能を身につけること、といった項目の重要度は、相対的に低い。

ここでの結果は、このサンプルが「職業的文化」傾向を示すという先の指摘と齟齬しているように見える。確かに、⑯人間関係を広くして豊かな人格を養い協調的人間をつくること大学教育の目的として重視され、⑰職業教育を重んじて就職に必要な技能を身につけることがそれほど重要視されないことは、クラーク＝トロウのいう「職業的文化」の特徴とは整合的ではない。しかし、これは、第一に我が国の大学教育、特に人文科学、社会科学の分野における教育が、それほど直接教育に役立つような職業教育を重視していないこと、また第二に、就職に有利に必要な条件が職業的知識、技能よりも協調的人間といった人格特性であることが一般に信じられていることの反映であるかもしれない。したがって、ここでもやはり、

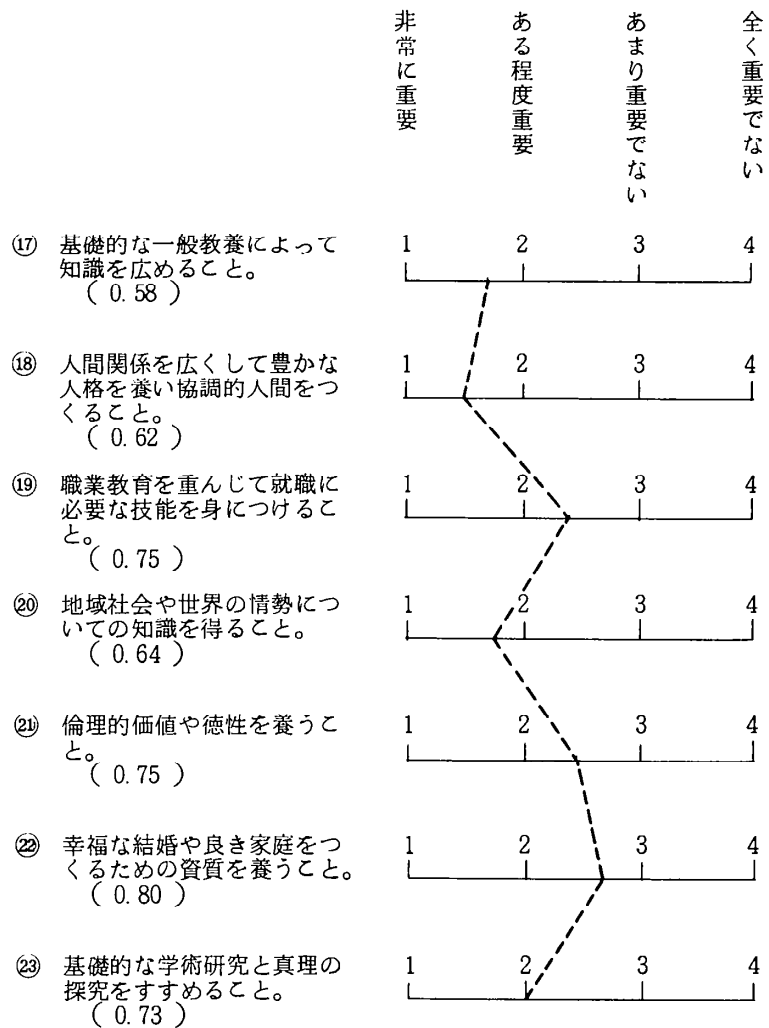


図3 大学教育の目的についてのプロフィール

( )内はSD、項目の番号は、次節で行う因子分析における変数番号に対応する。

対象学生の支配的文化は「職業的文化」または「カレッジイイト文化」であるということができる。

### 3-4 自己発達に関するプロフィール

サンプルは大学4年生であるが、彼らは、これまで大学教育を受けたことによって自らの諸特性をどれほど発達させたのであろうか。図4は、8つの特性について示してある。これらの項目の平均スコアの間には、それほど大きな差はみられない。最も成長したと答えられた項目は、②⑥社交性、協調性で、最も成長しなかったのは、②⑤一般的、基礎的の学力である。ここでは、項目間の差がそれほど大きくないので、推論の域を出ないが、大学教育の顕在的目的と考えられる②④専門的知識、技術、②⑤一般的、基礎的の学力が、それほど成長しないと回答される傾向があり、逆に、大学教育の潜在的目的、または、副産物と考えられる②⑥社交性、協調性や②⑦一般常識、マナー等が相対的に成長したと答えられている。ここでの結果も、前節と同様、「カレッジイイト文化」「職業的文化」が支配的であると解釈できる。

### 3-5 将来展望のプロフィール

大学生が将来選択する様々な進路について、彼らが考えているそれぞれの魅力度は、図5のとおりである。これによると③⑥大学院に進み、さらに深く勉強し、将来、専門領域で自分らしい仕事をしていくこと、について魅力を感じると答えた者の割合が少ないことを除いて、あとはすべてそれほど大きな差異はない。この結果は、少なくとも対象の大学生が、クラーク=トロウのいう「学問的文化」には支配されていないことを示している。またデータは経済学部限定されているので、しばしば指摘される経済学部生のビジネス志向の強さが確認されたともいえる。

しばしば大学生の将来展望を分類する基準とし

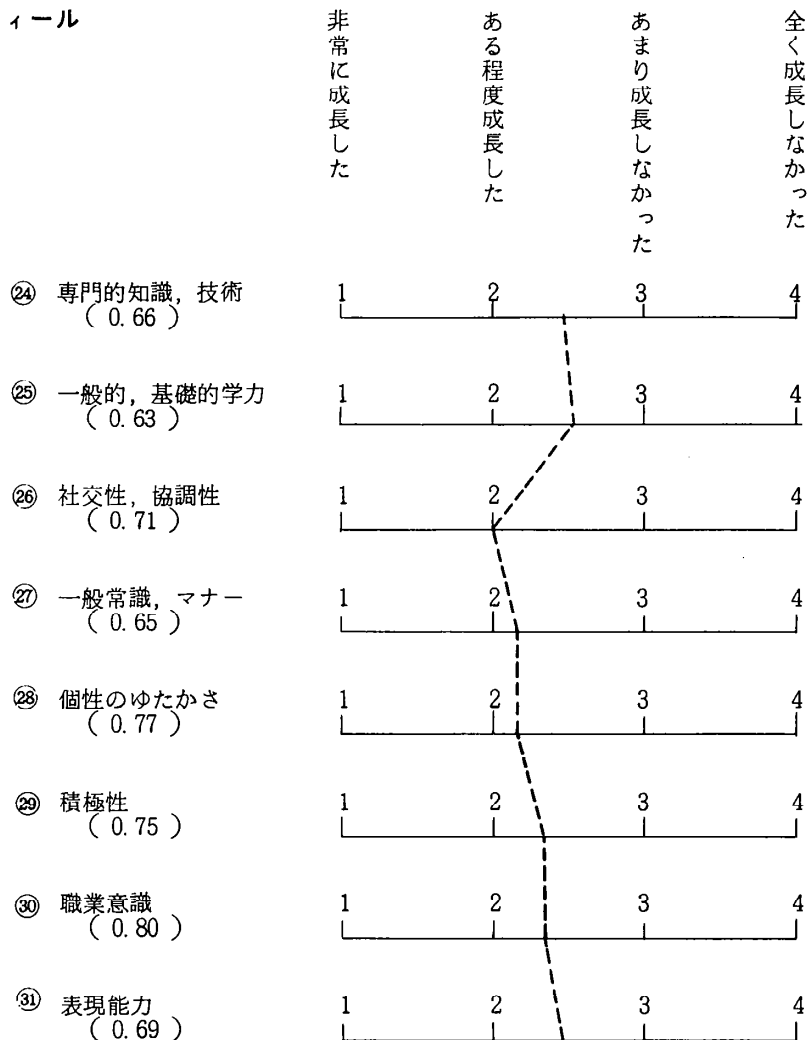


図4 自己発達に関するプロフィール

( )内はSD、項目の番号は、次節で行う因子分析における変数番号に対応する。



- ㉔ 一流大企業に就職し、将来、その組織で指導的立場を確立すること（一流企業就職→エリート社員→社長といった方向）  
(0.95)
- ㉕ 自分のセンスや趣味を洗練し、将来それで生計を立てていくこと（就職せず→センス、アイデア洗練→自由業、タレントといった方向）  
(0.94)
- ㉖ 外国に留学し、視野を拡大するなどして、将来、国際的に活躍すること（外国留学→視野拡大→国際人といった方向）  
(0.90)
- ㉗ とにかく、どこかに就職し、きちんと仕事をやりながら、世間並の生活を設計していくこと（就職→サラリーマン→安定した人生設計といった方向）  
(0.87)
- ㉘ 大学院に進み、さらに深く勉強し、将来、専門領域で自分らしい仕事をしていくこと（大学院進学→知識、技能修得→研究者、スペシャリストといった方向）  
(0.88)
- ㉙ 自分の主義、信条にしたがひ、かりにそれが反体制的であったとしてもそれを貫いた生活をきりひらいていくこと（主義、信条重視→世の為、人の為→社会運動家といった方向）  
(0.95)
- ㉚ 家の仕事を引き継ぐか、あるいは、自分で事業を起して、さらにそのビジネスを拡げていくこと（家業継承または自営→ビジネス拡張→事業家といった方向）  
(0.96)
- ㉛ 一流官公庁に入り、将来、国家的な見地からリーダーシップを発揮していくこと（官公庁就職→エリート官僚→政治家といった方向）  
(0.96)

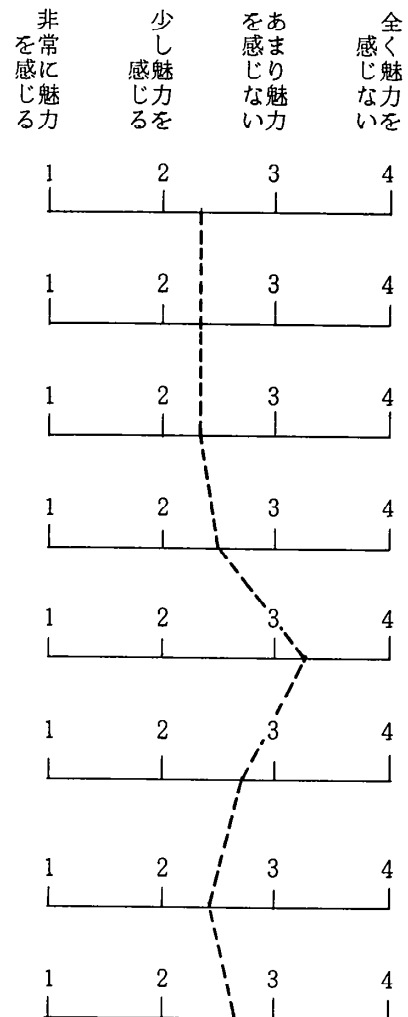


図5 将来展望のプロフィール

( )内はSD, 項目の番号は、次節で行う因子分析における変数番号に対応する。

「独立志向」か「組織志向」かということが用いられる。ここでの結果は、これら2つの志向性が同じ程度に支持されていることを示している。㉕自分のセンスや趣味を洗練し、将来それで生計を立てていくことは「独立志向」と、また㉔一流大企業に就職し、将来、その組織で指導的立場を確立することは「組織志向」と考えられ、それらのスコアはどちらもほぼ同じ程度である。したがって、ここではどちらの志向性が強いとは断言できない。

以上、サンプルに用いた大学生の諸特性について5つの側面から検討してきた。クラーク＝トロウの用語にしたがえば、彼らは「職業的文化」と「カレッジエイト文化」の双方の特性を備えてはいるが、「学問的文化」および「ノンコンフォーマリスト文化」に対する傾向性は弱いと考えることができる。彼らは、自らの成績以上の知的活動にはそれほど積極的ではなく、就職に関心を持ちつつ、社交性、協調性を重視する。つまり再びクラーク＝トロウの用語を用いると、これらの大学生の「大学への関与」の程度については、大小を判断することはできないが、「知識の追求」の程度に関しては、

弱いと考えることができる。

#### 4 下位文化の類型

以上、対象学生全体のプロフィールを検討したが、以下では大学生の下位文化の類型化を試みる。そのために、前節で検討した諸特性をすべて含めて因子分析にかけた。変数としての諸特性は、合計39である（学習態度に関する変数－5，関心事に関する変数－11，大学教育の目的に関する変数－7，大学在学中の自己発達に関する変数－8，将来展望に関する変数－8）。変数のそれぞれについて、前節の本文中および図中において変数番号を示しておいた。<sup>7)</sup>

表1は、バリマックス回転後の因子パターンを第3因子まで示したものである。これによると、第1因子を構成する変数は、在学中の自己発達に関するものである。在学中に、㉔積極性が成長した（因子負荷量＝0.76），同じく㉕個性のゆたかさ（0.73），㉖社交性，協調性（0.71），㉗表現能力（0.66），㉘一般常識，マナー（0.63）。興味深いのは、これらの変数は、すべて大学の授業では意識的には発達させることができない変数であり、専門的知識，技術や一般的，基礎的学力という変数がこの中に含まれないことである。

第2因子は、㉙学生運動に関心がある（0.65），㉚主義，信条重視の社会運動家に魅力を感じる（0.56），㉛大学院進学に魅力を感じる（0.54），㉜信仰や精神修養に関心がある（0.49），大学教育の目的として，学術研究と真理の探究を重視する（0.41）といった変数で構成される。この因子は，知識，真理を探究し，在学中にアイデンティティの追求というパターンを表現していると考えられる。この因子は先に検討したクラーク＝トロウの類型における縦軸「知識追求の程度」と類似している。

第3因子を構成する変数としては，㉠

表1 諸特性の因子分析結果

変数番号については3-1，学習態度のプロフィール本文および図2-図5を参照のこと。

変数	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3
①	-0.054	-0.062	0.029
②	-0.007	0.067	-0.065
③	-0.083	-0.008	-0.006
④	-0.041	-0.042	-0.178
⑤	0.012	-0.127	0.015
⑥	0.107	0.037	0.043
⑦	0.003	0.381	-0.001
⑧	0.020	0.037	0.254
⑨	0.096	-0.194	0.115
⑩	0.029	0.490	0.123
⑪	0.138	-0.017	0.550
⑫	0.147	0.109	0.277
⑬	0.026	0.015	0.301
⑭	0.083	0.051	0.540
⑮	0.001	0.650	-0.032
⑯	0.144	-0.055	0.344
⑰	-0.001	0.047	0.101
⑱	0.273	-0.071	0.524
⑲	0.092	-0.039	0.188
⑳	0.016	0.152	0.083
㉑	0.077	0.302	0.240
㉒	0.183	0.119	0.179
㉓	-0.006	0.417	-0.079
㉔	0.147	0.093	0.047
㉕	0.275	0.092	0.001
㉖	0.712	-0.086	0.241
㉗	0.638	-0.051	0.183
㉘	0.734	0.077	0.189
㉙	0.761	0.063	-0.011
㉚	0.345	-0.118	0.036
㉛	0.666	0.056	0.045
㉜	0.075	-0.147	-0.029
㉝	0.011	0.222	0.322
㉞	0.030	0.183	0.092
㉟	-0.068	-0.178	-0.140
㊱	-0.037	0.541	0.001
㊲	0.028	0.561	-0.016
㊳	0.037	0.009	0.042
㊴	0.009	0.106	-0.162

友だちづきあいに関心がある(0.55), ⑭趣味, 娯楽に関心がある(0.61), ⑱大学教育の目的として人間関係を広くして豊かな人格を養い協調的人間をつくることを重視する(0.52)を挙げることができる。

以下では, このうちの第1因子と第2因子に限定して, 大学生の下位文化を4つに類型化してみる。第1因子は, 「社交性の発達度」を示す因子と考えることができ, 他方第2因子は「アイデンティティの追求」を表現する因子と考えることができる。これらの軸を組合すと4つの下位文化の設定が可能である。図6のとおりである。

「社交性の発達度」が大きい, かつ「アイデンティティの追求」が強い組合せが, 第一の類型である。下位文化の類型を名づけることにより, その名称以外の重要な側面が捨象されてしまうおそれがあるが, 仮にこれを名づけるとすれば「万能型」といえるであろう。他人と協調的であり, かつアイデンティティを追求しようとするタイプである。第二類型は, 「社交性の発達度」が大きく, 「アイデンティティの追求」が弱い組合せであり, 「人格陶冶型」としておく。このタイプは, 万能型に比べるとアイデンティティの追求が弱い。第三類型は, 「社交性の発達度」が小さく, 「アイデンティティの追求」が強い組合せで, 「真理探究型」である。これは, 社交性の発達度は弱い, 信念, 知識を優先的な価値とするタイプである。第四類型は, 「社交性の発達度」が小さく, 「アイデンティティの追求」も弱い類型で「アパシー型」とする。

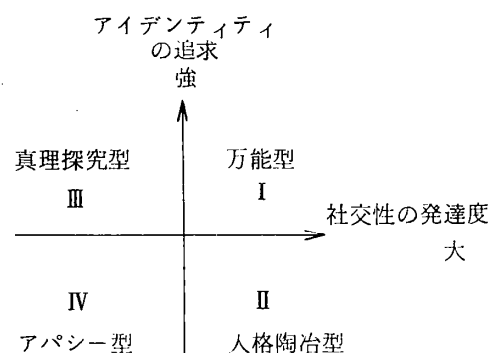


図6 我が国大学生の下位文化の類型

この類型をクラーク＝トロウの図式と比べると, 縦軸についてはほぼ類似しているものの, 全体としてはかなり異なる。理由は, クラーク＝トロウの横軸「大学への関与」が, この分析においては析出されなかったからである。そこでこの類型の横軸「社交性の発達度」をクラーク＝トロウの「大学への関与度」と仮りに同一視, 各類型をオーバーラップさせてみる。しかしながら, せいぜいこの類型の「人格陶冶型」とクラーク＝トロウの「カレッジエイト型」とが整合的であることぐらいで, 他の3つの下位文化類型は, ほとんど対応関係にない。

これらのちがいを生じさせた理由はいくつか考えられるが, 一つはデータの収集方法が, 質問紙法, 留置法によったためである。これによって授業に出席するか否かを別として, 頻りに大学に出てきている者だけが主に含まれてしまい, 「大学への関与」の度合という軸が析出できなかったことである。インタビュー法の悉皆調査によってデータが収集されれば異った軸が抽出できた可能性がある。第二の理由として考えられるのは, データが唯一経済学部の学生を対象にしたことである。経済学部の学生は, 元来ビジネス志向の強い学生が多いとされているので, それが「職業的文化」を独立して生じさせるのを妨げたと考えられる。また「学問的文化」についても, 同じことがいえる。

## 5 下位文化の形成構造

クラーク＝トロウによれば、大学生の下位文化は二つの要因とそれらの相互作用によって形成される。一つは、入学してくる学生の特性である。これは大学外の社会で形成され、全体社会の性格を反映する。というのは、学生の特性は、彼らがこれまで経験した生活によって影響され、また彼らの経験は、彼らや両親が全体社会の中で位置する社会的地位によって異なるからである。第二の要因は、入学した大学の性質である。大学の歴史、価値、志向性、構造的特徴、環境等がそれである。大学の性質は、現在の教職員と学生の人的要素によって形成されるだけでなく、それとは独立した何か他の影響力も備えている。

彼らの図式を簡単に述べれば、大学生の下位文化は、大学生の入学以前の属性と入学した大学の性質との相互作用で決定される。この図式が正しいとすれば、大学生の下位文化と学生の過去の諸属性、例えば家庭背景、と何らかの関係が存在するはずである。この仮説を検証するために、前節で抽出した大学生の下位文化が大学生の諸属性とどのような関連を持っているのかについて検討する。そこで、下位文化の指標として前節で行った因子分析で得られた因子得点を用いる。因子得点は、抽出された因子が、サンプルとした大学生の各々にどの程度強く作用しているかを示す値である。したがって、問題とする因子の因子得点が高い学生は、その因子で表わされる下位文化により近いと考えられる。ここで問題とするのは、第3因子までの3つである。この3つの因子が大学生の過去の属性である家庭背景、出身高校、現在の大学によってどのように異なるかを検討する。さらにこの分析では、将来どの程度の規模の企業に就職を希望しているかという変数も加えた。これは学生の将来を表わす変数の一つとして考えられ、その変数としての意味は後述する。家庭背景は父親の教育および父親の職業を用い、出身高校は、高校のタイプと高校の成績とを用いた。

方法は一元配置分散分析である。第1因子から第3因子までの因子得点と大学生の諸属性－父親の学歴（4グループ）、父親の職業（8グループ）、高校のタイプ（4グループ）、高校の成績（5グループ）、大学（5グループ）、就職希望の企業規模（6グループ）－計6つの属性との関連を調べた。したがって、 $3 \times 6 = 18$ の分散分析をしたことになる。大学生の諸属性の分布は、第3節で検討したとおりである。就職希望の企業規模について、分布は次のとおりである。①5,000人以上の企業に就職希望、30.1%、②1,000～4,999人、21.6%、③500～999人、18.5%、④300～499人、9.4%、⑤100～299人、9.4%、⑥その他、11.5%。

分散分析の結果は表2に示した。この表によれば、父親の学歴、父親の職業、高校のタイプの3つの属性は、第1因子得点、第2因子得点、第3因子得点のいずれとも関連がないということがわかる（正確な表現を使えば、例えば、父親の学歴による第1因子得点の差は、有意には存在しないということである）。高校の成績は第1因子得点と関連があるが、第2、第3因子得点とは関連がない。大学のタイプは第1、第2、第3因子得点とすべてに関連し、同様に就職希望の企業規模も第1、第2、第3因子得点のすべてと関連していることがわかる。

これまでの諸研究と参看させてみると、上記の結果は示唆に富む。以下の4点が重要である。第一点は、家庭背景と下位文化との関係である。クラークとトロウによれば、例えば、「カレッジイイト文化」は主としてアッパーミドルクラス出身者に、「職業的文化」はワーキングクラス出身者によって構成され、下位文化と家庭背景とは、相即不離な関係がある。また我が国の中等教育における

表2 一元配置分散分析の結果  
F値

	父親の学歴	父親の職業	高校のタイプ	高校の成績	大学のタイプ	就職希望の 企業規模
第1因子 因子得点	1.71	1.34	1.06	3.44 *	7.91 **	2.65 *
第2因子 因子得点	1.35	0.38	0.65	1.39	3.16 *	4.98 **
第3因子 因子得点	0.49	0.79	0.25	1.76	3.67 *	3.52 **
d. f.	3, 479	7, 478	3, 491	4, 491	4, 491	5, 490

\* 5%水準で有意  
\*\* 1%水準で有意

生徒文化についての諸研究が明らかとしたところによれば、親の学歴、職業が生徒文化の配分、分化に影響を及ぼしている。<sup>8)</sup>例えば、親が高学歴の場合、生徒は「勉強志向文化」に、親が低学歴の場合、「遊び、反抗志向文化」に類型化される傾向がある。しかし、上記の研究とは異って、本稿での結果は、父親の学歴および職業と学生の下位文化とが有意な関係ではないことを示した。本稿の結果とクラーク＝トロウの論議との懸隔の一つの理由は、日本とアメリカの大学の在り方、特に大学の選抜に関する機能が異なっていることが挙げられる。すなわち、日本の大学の場合、一旦大学に入れば、過去の属性は現在の下位文化に対して影響力を持ちえない何らかのメカニズムが存在することが考えられる。例えば、家庭背景がいずれであっても、「お坊ちゃん大学」に入学したら、「お坊ちゃん」的文化を身につけてしまう。さらに本稿の結果と中等教育レベルでの生徒文化研究結果との相違についての一つの理由は、同様に、我が国では大学と中学校、高等学校とでは、生徒、学生の過去の属性の影響力の有効性に関して明確なちがひがあると考えられる。中学校や高等学校では、親は子どもの文化に関して影響を及ぼすが、大学ではそれがもはや意図的にも無意図的にもできない。

第二の点は、家庭背景と同様、高等学校の属性も下位文化と関係が有意ではないことである。唯一の例外は、高等学校での成績と第1因子得点の有意な関係である。興味深いのは、第1因子で代表される下位文化に影響するのは、高等学校のタイプよりも高等学校での成績のほうが強いということである。つまり、どんな高等学校に在学したかよりも、どのくらいの成績を修めたかということが現在の下位文化形成に大きな影響を与えたと推測される。他の条件がすべて等しいとすると、進学有名高校に学んだ成績の良い学生と、そうでない高校に在学した成績の良い学生とは大学時代の下位文化が類似する可能性があるということである。逆に、同一高校に学んだとしてもその時の成績にちがひが存在すれば、現在の下位文化が異なる可能性がある。J. ローゼンバウムは、主として学業成績による生徒の分離化をトラッキングと呼び、その分離化が学校教育以後の労働市場にもたらされ社会的地位、生活機会の不平等をもたらすと指摘している。<sup>9)</sup>本稿の結果は、トラッキングが大学の下位文化に影響を与え、高校と大学との連鎖的關係の存在を示唆している。

第三に、指摘しなければならないのは、大学が大学生の下位文化形成に大きな役割を果していること

とである。その影響力の強さは、3つの因子得点のいずれにおいても、大学のタイプによって有意な差が存在することからも明らかである。第一、第二点を考慮に入れば、高校の成績と第1因子得点の関連性を例外として、大学入学以前と以後では、下位文化形成には断層があるといえる。クラークとトロウは、大学により支配的な下位文化が異なると論じたが、本稿の結果は、これが日本でも当てはまることを示している。大学と下位文化との関係をもう少し詳しく見るために、大学毎の因子得点の分布を表3にまとめた。表中の大学AからEは各々の大学を表わし、AからEの順番は、おおよその入学難易度によって並べてある。Aが最も選抜的な大学である。これによると、第1因子の得点は、大学Aおよび大学Bという選抜的な大学において低い傾向が明らかである。つまり選抜的な大学ほど、第1因子の特徴である社交性や協調性が大学時代に養われなかったことになる。第2因子について、大学毎に差があるものの選抜度による一定の傾向は明確ではない。第3因子についても同様である。

最後に、下位文化の形成構造を探究するうえで、大学生の過去の属性より彼らの将来の希望進路のほうがより重要であることを指摘しておく。分散分析の結果は、将来就職希望の企業規模と3つすべての因子得点との有意な関係、特に第2、第3因子得点と強い関連

表3 大学別因子得点の平均値

大学	サンプル数	第1因子得点 平均値(SD)	第2因子得点 平均値(SD)	第3因子得点 平均値(SD)
A	94	-0.28 (0.90)	0.02 (0.76)	-0.25 (0.85)
B	111	-0.23 (0.92)	-0.19 (0.83)	0.14 (0.81)
C	89	0.09 (0.83)	-0.06 (0.87)	0.04 (0.80)
D	120	0.27 (0.91)	0.19 (0.81)	0.08 (0.76)
E	82	0.14 (0.86)	0.03 (0.98)	-0.07 (0.82)

性があることを明らかにした。この結果は、大学によって何故支配的な下位文化が異なるのかを説明するのに重要な示唆を与える。先に指摘したように、大学によって支配文化が異なることは明らかにされたが、それが何故か、大学のどんな要因が支配的文化を形成するのかについては、ブラックボックス化し明らかにしなかった。しかし、この点についてJ. マイヤーは、大学は、卒業後の進路展望を学生に明らかにすることによって在学生の価値、パーソナリティ、態度、期待に大きな変化をもたらすとしている。<sup>10)</sup>これは「チャーター理論」として、最近検証されつつある。本稿で用いた就職希望の企業規模も大学生の進路展望の大きな要素と考えられるので、大学はこの進路展望を通して大学生の下位文化形成に影響を及ぼしていると考えられる。したがって、本稿の結果は、チャーター理論の有効性を示すものである。

## 6 おわりに

本稿では、クラーク＝トロウの下位文化類型を参酌し、我が国の大学生の下位文化を類型化した。そしてその類型を形成すると推測しうる要因について検討を加えた。その結果、「社交性の発達度」

と「アイデンティティの追求」の2つの軸を用いて、下位文化4類型を設定、呈示した。このタイプの形成に影響を及ぼすと考えられる要因は、大学生の過去の属性よりも、大学や将来の進路であった。

これらの結果の一般化は、しかしながら、我が国大学生全体についてなされるというよりむしろ一部の大学生に限られると考えられるべきである。こうした制限をする理由は、明日なことであるが、分析に用いたデータの制約である。本稿でのデータは、経済学部それも4年生のみに限られていた。したがって、大学生の下位文化をより一般的な形で論議するには、多様な学部の学生を含み、大学一年生から4年生までの範囲にわたるデータが必要となろう。こういったデータであれば、さらなる利点として下位文化形成に性別、学部(カリキュラム)、学年といった要因がどの程度強く作用しているかを明らかにすることができる。したがって、本稿では明らかにできなかった大学のこういった要素が学生の下位文化形成に影響を及ぼしているのかについてより深まった形でアプローチできる。

#### 注

- 1) 最近の下位文化研究の総合的レビューには武内清、苅谷剛彦、浜名陽子「学校社会学の動向」『教育社会学研究』第37集 日本教育社会学会編 東洋館出版 1982年が挙げられる。
- 2) 例えば、NHK放送世論調査所編『日本人の職業観』日本放送出版協会 1979年
- 3) Clark, Burton R. and Martin Trow, "The Organizational Context" in Theodor M. Newcomb and Everett K. Wilson (ed.) *College Peer Group*, 1966 Aldine Publishing.
- 4) 例えば, Hutcherson, Sigrid M. and Chapman, D. "Patterns of Student Interaction in Clark-Trow Subgroups" *Research in Higher Education*, Vol. 11, No. 3, 1979: 233-247, Long, Samuel, "Students' Orientations Toward the University: An Investigation of the Clark-Trow Typology", *Research in Higher Education*, Vol. 7, 1977: 13-28, Morstain, Barry R. and Kraft, R. "Educational Orientations of College Students; A Typological Analysis", *Research in Higher Education*, Vol. 10, No. 3, 1979: 237-251.
- 5) 調査票作製にあたって、主に以下の文献を参考にした。NHK放送世論調査所編前掲書、柴野昌山「大学教育に対する社会的期待と効果—大学卒業生と在学生の調査から—」京都大学教育学部紀要ⅩI 1965 日本リクルートセンター「学歴に関する企業の意見調査」1975年、南隆男、若林満他「大学組織における学生の自我同一性確立過程」『哲学』第71集 慶応大学 三田哲学会 1980年。
- 6) このデータの詳しい説明と分析は、Maruyama, Fumihiko, *The Process and Structure of Student Characteristics Formation in Japanese Higher Education*, Ph. D. Dissertation, Michigan State University, 1983 参照のこと。
- 7) 本文中にも図中にも指摘していない変数⑤は大学での成績である。その分布は、①非常に良いと回答した者、1.6%、②良い、12.9%、③普通、52.3%、④悪い、25.9%、⑤非常に悪い、7.3%である。
- 8) 武内清、苅谷剛彦、浜名陽子 前掲論文参照。
- 9) Rosenbaum, James E. *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*, John Wiley & Sons, 1976
- 10) Meyer, John W. "The Effects of the Institutionalization of Colleges in Society" in Feldman, K. A. (ed.) *College and Student*, Pergamon Press, 1972.

## A Typology of Student Cultures in Japanese Universities

Fumihiro Maruyama\*

Although there are many sociological studies on student cultures at secondary education levels, almost no studies have done on the typology of student cultures at higher education levels in Japan. This study tries to present the typology of cultures among Japanese university students. The data used includes more than 500 Economics students from five different universities in the Nagoya area. These were collected by questionnaires administered in the Spring of 1980.

In this study, factor analysis is done on student's learning behavior, their values, their attitude toward college education, their growth during college, and their future aspirations, which were asked by the questionnaire used. As a result, three factors are obtained. The first factor is identified, as the growth of various characteristics such as personality, sociability, and expressive ability. The second factor is called the pursuit of ideas or identity during college. The third factor was composed of student's concerns of friendship and leisure, and fun. Using the first two factors, one typology of student culture can be presented which distinguishes four types of student culture (Figure). The first is called "all-round", those who develop both sociability and ideas. The second type is "fun." The third is called "apathy" because both sociability and identity are not strongly pursued. The final type is "brilliant."

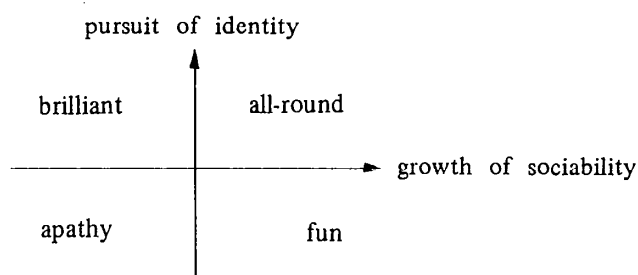


Figure A Typology of Student Culture

In the second part of this study, the determinants of the typology are examined. The dependent variables are the individual student's factor score coefficients of three factors from the factor analysis, which was described earlier. The independent or explaining variables are father's education, father's occupation, type of high school, grade in high school, type of university, organizational size which student expects to be employed. The instrumentation is one way ANOVA.

The findings can be summarized as follows;

1. Neither father's education nor father's occupation is related to any of the three factors.
2. The type of high school is not related to any of the three factors.
3. The high school grade is associated with the first factor, but not with any of the other two factors.
4. Both type of university and the organizational size to be employed are strong determinants for all of three factors.

Thus, it is concluded that the formation of student cultures is affected by the university they attended and size of the organization in which they expected to be employed. It is not likely that the attributes, which students have had before entrance of university, have any significant effect on the student culture.

\* Research assistante, R. I. H. E.